
追憶

春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

追憶

【Nコード】

N1326A

【作者名】

春

【あらすじ】

アケミとアツシのストーリー。

遠く…遠くで爆発音がした。
ふと外を見ると山が燃えていた、いいしれぬ恐怖が胸に襲いかかってくるその時

ピンポン！

玄関のベルが鳴る…

（誰？こんな時に）

恐る恐るドアを開ける。…ガチャ

「アケミ…無事か？」

そこに居たのつい数時間前にできたばかりの彼氏だった。

「アツシ…？」

この雨の中、走って来たのかずぶ濡れで、ズボンは汚れていた。

「はあ…無事で良かった」

…思わぬ言葉をかけられ、顔が赤くなり、少し涙が出る。

「？ どうした？どこか怪我でもしたのか？」

はつと気づいてこう言い返す。

「はあ？あんたバカじゃないの？家の中にいるのにどう怪我しろっというの？」

それと同時に思う。

（ああ…コイツホンモノだ…）

キョトンとしながら

「ははっ、それもそうだな、でもホント無事で良かったよ」

しかし、アケミは思ってしまった。

（あーあ、これがシュウジだったらなあ…！…って、何考えてんのあたしは！）

情けなかった、申しわけなかった、これほど自分を想ってくれてい

る相手に、

（あたし、まだ…）

そう、好きだった。いつから好きだったのだろう、それすらも分
らず好きだった。シユウジには決して言えなかった。

そのことは目の前にいる彼氏に言ったが…

- 数日前

学校の屋上。

そこには二人の影があった。

「アケミ！オレの彼女になってくれ！」

ビックリした、そして言う。

「な、なんであたしがあんたの彼女になれっていうの！？」

少しの沈黙が流れた…

「オレ、自衛隊に入ろうと思うんだ」

「え…？」

「だからアケミ！お前を守らせてくれ！勇気をくれ！」

アツシの、その目は真っ直ぐ、ただ真っ直ぐアケミを見ていた。

その目を見ていたアケミは、胸がすごく苦しくなってきた。

「アツシ…」

アケミのその目には涙が…

「アツシ、あたしね、好きな人いるんだわ、シ、シユウジのこと、
好きなんだわ、でもね？いまさらゼツタイ恋人とかなれんわ…」

しかし、

「よかった、じゃあオレの彼女になってくれ、好きじゃなくていい
から彼氏にならせてくれ、そしたら、少しは戦うの怖くなるか
らさー！」

思わぬ返答に戸惑いつつも…

「アツシ…ごめん」

…時間が一瞬止まったような気がした…

「…そうか…」

「うん、ごめんね?」

「アケミが謝ることないよ」

.....

・そして数日後

(びつくりしたなあ、まさかアツシが...)
ぼくっとながら歩いてた。

(少しだけカツコよかったな...)

(でも、バカだよ、こんな女のために...勝手に好きになって、守りたいって...)

(何も持っていない自分のために...)

(バカだよ...)

(バカ)

(バカ) (バカ)

ワケの分らない思考を巡らせ...

「あー!もう!なんなのよ!あたしは!?!」

どうしよう、寂しい、怖い、そのような感情が一気になだれ込み...

(...そうだよ、あたしは体育会系なんだ!)

答えは、出た。

(でも、その前に...)

・翌日

「アツシ...」 思わぬ来客に驚くアツシ「ア、アケミ!?!」

「アツシ...あの...」

やはり恥ずかしかった。顔が赤くなる。

「...付き合ってあげる」耳を疑った、ありえないことが今起きていた。

「今...なんて...」

「付き合ってあげるって言ったの!」

思わずどなってしまったしかし

「ありがとう」

である。

「これで未練なく自衛隊に行けるわ」

…アツシの心に迷いは無かった。

守れるもの、守らなきゃいけないものが今ここに…

数分の会話をした後。

「じゃあ、そろそろ帰るね」

「ああ」

…そして現在（数時間後）

「どうした？」

「あ、いや、何でもないの」

「そうか、それならいいけど…」

「ああ！もう、何でもないって言ってるじゃないの！」

「あ、ああ…」

さすがにびびる。

「だいたい！なんであんなそんなずぶ濡れなの！？」

「いや、だってオレ！…アケミの『彼氏』だからさ…」

ポロツ

涙が出た。照れ隠しに言う。

「うん、ありがとう」

会話が續かない…

とりあえず…

「アツシ、とりあえず上がりなよ、ほら、タオル」

「ありがとう、それじゃ、おじゃまします」

アケミの部屋。

「うわっ！オマエ似合わない人形持ってるな！」

ドガ！

「それは、ちせからもらったものなの！」

言葉と同時にわき腹にケリを食らったアツシは…

「ぐおおゝ、モ、モ口に入ってた」

悶絶していた。

「もう…バカ…」

数分後。

「おさまった？」

「ああ、だいぶ、しかしひでえな、いきなりケリを食らわすとはな」

「ごめん」

「家族とかは？」

「今日はいない…」

「そうか…」

また沈黙、最近なぜが多い。いや、それよりも…寂しそうなアケミの方が気になった。

「今日はもう遅いし、泊まっていきなよ」

「…え?…」

ベッドに腰かけながらつまらなさそうに言う。

「どうせ家族も帰って来ないし、一人だつまらないから話し相手になつてよ」

アツシは嬉しかった。自分のことを『彼氏』と認めてくれたと思ったからだ。

「それに自衛隊に行くんでしょ? だったら…」

言葉が止まった。

「…だったら?」

と聞いてみる。

「す、少しでも一緒に居たいしよ? は、離れたくないよ…」

アケミの、その顔は赤く、そして涙でいっぱいだった。

「アケミ…」

アツシも少し涙がでた。そして思う。

(ああ、オレのことをここまで想ってくれてるなんて…)

うつむいたままのアケミを、アツシはそっと抱きしめた。

「あ? ちょ? アツシ?」 「アケミ、ごめん、オレも同じ気持ちなんだ…」

…
「オレだって離れたくないよ」

…
「でも守りてーんだ」

…
「あの日からずっと考えていたんだ、オレが何ができるか…」

…
「もう決めたんだ」

…
それは別の意味での『告白』だった。

アツシは思っていることすべてぶつけた。

アケミは…

アケミはせつなかった。女として、彼女として。

「じ、じゃあ、せめてあたしと…」

アケミはさつきよりも顔を赤くしていた。

その意味をとったアツシは…

「いいのか？」

恥ずかしながらうなづく。

「うん」

そして、二人は生まれたばかりの赤ちゃんと同じ格好になった。

「は、恥ずかしい…」

「オレだって恥ずかしいよ」

アケミは笑いながら、

「『友達』なのにこんなコトおかしいね」

アツシも赤い顔で笑いながら、

「へへ、オレもー」

「フフフ」

「マジメにやれよー」

…
「痛くってごめんね？」

…
「気持ちよくなってごめんね？」

…
「心はあげなくてごめんね…」

…
「ごめんね、ごめん…」
「アケミ…」

泣きながらしがみつくアケミをアツシは…
やさしく、力強く、一生懸命動いた。

「すげー気持ちいい…」
「…バカ」

それから二人は学校をサボり1日ずっと一緒にいた、まどろんだ、永遠に続くような、そのような気がした。

- f i n -

（後書き）

< font size = 2 > ッに「やー！（壊）いやー今回は暴走
しすぎましたね（^ー^；）」

だってだってこんなのアケミ（もしくはアツシ）じゃない！って
皆さんの声が聞こえますから（爆）すいませんm（――）m
ま、こんなもんでいいでしょう（Σオイオイ）中途半端に終わった
ような…でもこれ以上書くと暴走が止まらくなります。ですからあ
えてここで止めました。（ホントかよ…）これを書くのにサイカノ
を韋編三絶しましたから、目が痛い…

時間構成、変ですね。その辺はあしからず…始まりがあるからこそ、
終わりがある。その逆もまた然り。では、読んでくださった方
々、ありがとうございますo（^ - ^）o < / font >

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1326a/>

追憶

2010年10月12日16時44分発行